

授業における対話の組織化

「教育とは何か」という問いは、古くて新しい課題である。このことは、教育現象（すなわち、教育活動・教育作用）が人間の存在にとって根源をなすからであろう。そして、教育作用は陶冶財を内容とし、成熟者としての教師と未成熟者としての児童・生徒との間に存在する有機的な働きである。この有機的な働きは、対話という形をとることが多い。このような意味で、本校の教育研究が「対話を生かした学習指導」を標榜したことは正鵠を射たものであると信ずる。

今日のがわが国の教育界は、他に範をもとめるというのではなくて、自らが進むべき道を模索しながら、一步一步前進しなければならない時期にきている。このような時に、われわれの心の縁となるのは、「対話」であろう。そこで、このような考えのもとに、対話を授業に生かすことを考え、いろいろと研究を重ねてきたのであるが、これは従来からの本校の研究である「主体性を育てる学習過程」、「主体から創造性への学習過程」、「創造性を育てる学習指導の方略」、「創造的学び方」という一連の研究の上に築かれたものである。それというのも、これまでの本校の研究で問題にしてきた認知の過程には、解決しなければならない幾つかの問題があった。たとえば、個の認知過程で、他者との関わりはどうなるのかというような事がそうである。ちょうど、このような課題を抱えている時に、私どもに示唆を与えてくれた書物がある。それは、金子晴勇著「対話的思考」（創文社）である。私どもは、この著をもとに、3カ年間研究を重ね、その成果を「授業における対話の組織化」という著書にして、世の多くの方々から御指導を賜りたいと思い、浅学をも顧みず本書の出版を思い立った次第である。

読者諸氏のなかには、「対話」ということと、学習過程ということとがどのように結びつくのか、理解に苦しむ方がいらっしゃるかもしれない。このことは私どもとて同じ悩みをもつことがあるが、ただ今では対話を「対向」「対立」「交流」「共感」「発展」という五つの相ととらえ、実際の学習指導に位置づけたのである。この考えは、前出書「対話的思考」から得られた私どもの今日の到達点ではあるが、このような受け止め方は、金子晴勇氏にとっては迷惑なことかもしれない。もし、私どもの誤解であれば、ここにお詫びを申しあげ、御寛恕いただきたいと思う。

ところで、本書では、まず、第一章で、現代教育の課題と対話的思考について理論的な解明を試み、続いて第二章で、出会いの階層的深化をめざす学習指導について、全教科の根底に流れる基本的な理念について述べた。そして、これら二つの章の理論的観点を実際の授業でどのように具現化するかを、それぞれの教科の立場から記述した。各教科では、初めに、全体的な理論をどう受けとめ、続いてそれをどのように実践するかの方略を述べ、それに沿った授業例を展開した。

しかしながら、私どもの浅学や思い違いや誤りなどが多かろうと思う。読者諸賢の厳しいご批正並びに御指導をお願い申しあげる次第である。

なお、本書は、この研究並びに著書出版の全過程を通じて、数多くの人びとのおかげに負うところが大きい。特に、本学の大賀一夫学長並びに国立音楽大学金子晴勇教授には、研究の基調を、本学の岡村二郎教授（前本校校長）には、直接理論と実践の両面を御指導いただいた次第である。そして、本学の多数の教官各位と本校職員の先輩諸氏には再三・再四にわたる御指導をいただいた。また、本校の児童たちには、実践授業でずいぶんと協同を願った次第である。

また、これまでの数著に引続き本書の出版をお願い申しあげたところ、それを快くお引き受けくださった明治図書、特に編集部の江部満氏と樋口雅子氏には大変お世話になった。

この機会に、以上の諸氏に対し、心からお礼申しあげる次第である。

昭和 53 年 3 月
福岡教育大学附属久留米小学校
校長 畦森 宣信